

6

ジェイ・ハーバート・モーガンは、フラー建築株式会社の設計技師長となるため、大正9年に51歳で来日。丸ノ内ビルディングなど、日本における建設業近代化の代名詞となる大規模ビルディングの建設に参画し、アメリカの先進的な施工技術を伝えるという大きな役割を果たした。すでに建築家として豊富な経験を積んでいたモーガンは、その後、日本での実績と知己を得て、日本にとどまって自身の設計事務所を立ち上げ、居留地の建築家として外国人コミュニティの中で力を発揮した。住宅、学校・教会などのミッション建築を主体に、銀行や病院など、作品は多岐にわたるが、その足跡を辿ると、アメリカそのものだったモーガンが、徐々に日本建築の魅力を発見し、作品に投影していったことが分かる。今号では、彼が日本にもたらしたものは何かを考えてみたい。

ジェイ・ハーバート・モーガン

J a y H e r b e r t M o r g a n



所蔵：横浜都市発展記念館

ユニオンビルディング入口詳細図【部分、1927】
【所蔵：横浜開港資料館】

アメリカと日本を生きた建築家 | 水沼淑子 | Yoshiko Mizunuma

フラー建築株式会社の設計技師長

大正9年[1920]2月20日、チャイナ・メール・SS所有の客船D.S.ナイル号から1人のアメリカ人建築家が横浜港に降り立った。男の名はジェイ・ハーバート・モーガン(Jay Herbert Morgan)、フラー建築株式会社(George A. Fuller Company of The Orient Ltd.)の設計技師長に就任するための来日だった。来日時のパスポートによれば年齢は46歳とあるが、アメリカの記録を辿ると実際には51歳だった。フラー建築株式会社とは、アメリカ最大手の建築施工会社・フラー会社と三菱合資会社地所部が大正9年3月19日に設立した合弁会社で、日本では「丸ノ内ビルディング」「日本石油ビル」(有楽館)、「日本郵船ビル」[「立憲政友会本部」[1923]、「クレセント・ビル」[1921]の施工を手がけた。時あたかも第一次世界大戦後の好況期であり、フラー会社にとってはアジア進出への足がかり、日本側にとっては近代的施工技術の修得、その思惑が合致して合弁会社は発足した^[1]。丸ビルの竣工は大正12年[1923]2月で、鉄骨鉄筋コンクリート造地上8階建て、地下1階、延床面積60,451.2㎡と戦前期最大規模のオフィスビルであったにもかかわらず、工事期間はわずか2年7ヵ月と当時の常識を覆すものだった^[2]。設計は三菱合資会社地所部の建築家・桜井小太郎が担当した。しかし、フラー会社も日本進出に際しアメリカから建築家を連れてきた。日本で仕事を展開するためには自前の建築家が必要と判断したのだろう。それが、モーガンだった。丸ビルや日本石油ビル建設に際してのモーガンの役回りは、意匠上重要な部分の施工図面の作成などにあったようだ^[3]が、クレセント・ビルや立憲政友会本部の設計はモーガンが担当した。フラー会社は関東大震災後さまざまな要因で日本から撤退する。しかし、モーガンは日本に残り、日本で建築家として生きる道を選択した。

世紀末アメリカでの建築修行

51歳で来日したモーガンにとって、日本は第2の人生の舞台といえるだろう。モーガンの日本での足跡を紹介する前に、アメリカでの軌跡を確認しておこう。モーガンは、ウェールズから移民した家具職人トーマス・モーガンの息子として、明治元年[1868]12月10日、ニューヨーク州パツファローに生まれた。明治18年[1885]17歳の頃、両親と共にミネアポリスに移り住み、MIT出身で歴史主義建築を得意とするワレン・B.ダネル(Warren B. Dunnell)のもとで働き始めた^[4]。ダネルは歴史に大きく名を刻むような建築家ではなかったが、AIA(アメリカ建築家協会)の名誉会員であったことから推測すると、多くを学ぶことのできる建築家だったのだろう。モーガンは20歳の時に姉夫婦の住宅(ボーウェン邸)を設計する機会に恵まれ、雑誌にも取り上げられる^[5]。モーガンは順調に建築家としての修行を積んでいった。その後、ミネソタ州建築課やシカゴ・グレート・ウェスタン鉄道会社などで経験を重ね、明治25年[1892]23歳の頃にはミルウォーキーに移った。ミルウォーキーでは建築家ウィリアム・D.キンボール(William D. Kimball)の事務所を経て、ヨーロッパで建築教育を受けたドイツ人建築家オットー・ストラック(Otto Strack)の事務所で働くようになる。ミルウォーキーはビール生産で著名な町だが、ストラックは大手ビール会社のひとつパプスト社の仕事を多く手がける建築家であり、モーガンが在籍した19世紀末には町の中心にネオルネサンス様式のパプスト劇場を完成させていた。モーガンは、アメリカ北東部に移り住みながら歴史主義を得意とする建築家のもとで修行を重ねた。ミルウォーキーの目と鼻の先、シカゴで万国博覧会が開催されたのは明治26年[1893]のことである。シカゴにはすでに「リライアンス・ビル」など新たな時代に対応する建築が芽生えていた



立憲政友会本部 | 1923年8月頃竣工。RC造2階建て。横浜開港資料館所蔵の設計図には、建築家として渡辺仁の名も併記されている【出典：「丸の内百年のあゆみ」三菱地所株式会社社史編集室編【三菱地所株式会社/1993】】

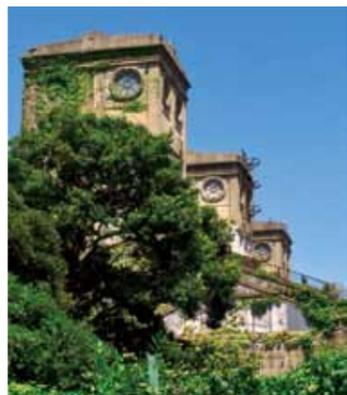


ボーウェン邸 | ミネアポリス郊外の高級住宅地に建つ。勾配の強い切妻屋根を組み合わせた複雑な外観を持つなど、当時アメリカで流行していたクイーン・アン様式の住宅である【出典：「Jay H. Morgan—アメリカと日本を生きた建築家」】



モーガン設計事務所 | 1928年には自らが設計したユニオンビルディング(山下町75)内に事務所を置いた。当時の所員としては東京高等工業卒の大須賀矢彦、カリフォルニア大学出身の川崎忍らがいた【所蔵：横浜都市発展記念館】

[1] フラー会社側はリスクが大きいため乗り気ではなかったという
[2] 1917年竣工の「旧東京海上ビル」(延床面積約6,000坪)は工期4年7ヵ月、1922年竣工の「三菱銀行本店」(延床面積約3,000坪)が5年10ヵ月を要したことから比べれば、この工期がいかに短かったかが分かる【参照：山下寿郎「わが国建築施工史からみた丸の内ビルディング建築工事(3編 施工)」近代日本建築学発達史/日本建築学会編【丸善/1972】】
[3] 丸ビルを始め、モーガンがフラー建築株式会社の仕事として関与した建築はいずれも現存しない
[4] ダネルの代表作としては「フェルグスフォールズ州立病院」[「ミネアポリスウェストミンスター教会」]などがある
[5] 「Northwestern Builder Decorator and Furnisher」1889年11月号。雑誌で紹介されたモーガンの肩書きはドラフトマンだった



根岸競馬場馬見所

上——一等馬見所(左、1929年竣工)と二等馬見所(右、1930年竣工)。横浜根岸に競馬場が建設されたのは1866年であり、1880年には日本レース倶楽部が組織され、天皇を始め貴顕の社交場となった。関東大震災後にモーガンが再建した競馬場は、RC造で一等馬見所と二等馬見所からなり、屋根付きの大スタンドは以後の競馬場のモデルとなったといわれている[所蔵:横浜開港資料館] 下——現在、競馬場一帯は根岸森林公園となっている。現存するのは一等馬見所のみである。付近には「モーガン広場」が設けられ、解説版が設置されている



関東学院中等部校舎(現・中学本館) | 1929年竣工。礼拝堂の置かれる塔状部分にはイギリス中世のノルマン様式を用い、バトメントを始めさまざまな装飾を施す。教室棟は当初は2階建てだった。この建物に先んじ、1927年には高等部校舎が竣工している[写真:筆者]



横浜クライストチャーチ・山手聖公会聖堂 | 1931年竣工の、横浜では3代目のクライストチャーチである。2代目はJ.コンドルの手になるヴィクトリアン・ゴシック様式の聖堂だった。イギリス中世のノルマン様式を用い、RC造の外壁を大谷石で仕上げる。震災や放火などの災禍を乗り越え、信徒たちによって大切に使われ続けている[写真:筆者]

[6] フラー会社におけるモーガンの仕事については、フラー会社の社史「George A. Fuller Company 1882-1937」掲載の一覧から判明する

にもかかわらず、万国博覧会の会場を彩ったのは、アメリカン・ボザールの建築家たちによる古典主義の建築だった。結局のところ、19世紀末という時代、そしてアメリカ北東部という場所で素直に建築を学んだ結果、モーガンは歴史様式を自在に操る建築家として成長したのだった。

さらに、30歳の時モーガンに大きなチャンスが巡ってきた。フラー会社の招きでストラックと共にニューヨークに進出することになったのだ。その後は、ニューヨークやワシントンDCでフラー会社の仕事を数多くこなす[6]。ホテルから倉庫まで都市を彩る多様な建築を手がけることになる。

ニューヨーク時代の代表作はブロードウェイの大劇場「ヒポポドローム」である。古典主義を基調としながらイスラムや東洋の諸要素を取り入れ、外観に赤レンガやテラコッタを用いた華やかな建築だった。その後、建築家チャールズ・A・リード(Charles A. Reed)の導きで、ニューヨークの「グランド・セントラル・ターミナル」の設計にもかかわることになるが、リードの逝去を機に、マンハッタンのマディソン街で設計事務所を自営するに至る。モーガンは自身の才覚で運命を切り開き、アメリカン・ドリームを実現したのだった。

モーガンはミルウォーキー時代に同僚の女性と結婚し、3児をもうけた。長男には自らのミドルネーム、ハーバートを与える。建築家としての人生は順調だったが、この間、家庭生活は破綻する。自営して10年ほどが過ぎた大正9年[1920]、フラー会社の日本進出に際し招聘され、すでに別居状態にあった家族をニューヨークに残し、単身日本に向けて出発した。

震災後の横浜をつくる

モーガンは大正11年[1922]、フラー建築株式会社から独立し、東京の日本郵船ビルに事務所を構えた。アメリカには戻らず、日本で建築家として生きる決心をしたのだ。モーガンは来日後すぐに、1人の日本人女性と出会う。日本での人生のパートナーとなった石井たまのである。英語に堪能だったたまはモーガンの事務所では秘書を務め、公私にわたるパートナーとなった。大正15年[1926]には横浜に事務所を移し、昭和12年[1937]に横浜で逝去するまで、旺盛な設計活動を展開した。モーガンの日本での足跡は、北は仙台、南は松山まで確認できる。無論、その中心は横浜だった。

モーガンが日本で活動を開始した直後、関東大震災が起こる。震災はモーガンに多くのチャンスをもたらした。アメリカ北東部での建築家としての長いキャリアと実績、フラー建築株式会社の建築家として来日し丸ビル完成に貢献、近代的な技術を用いながらも歴史の中の様式を駆使し破綻なく建築を仕上げるのできる技量。いずれも震災後の横浜が必要としたものだった。

日本におけるモーガンの仕事は大きく4つに分けられる。1つ目は、横浜の外国人コミュニティにおける公的な建築。横浜の「アメリカ領事館」[1932]や「根岸競馬場馬見所」[一等馬見所:1929、二等馬見所:1930/一等馬見所のみ一部現存]、「ヨコハマ・カントリー・アンド・アスレチック・クラブ(YC&AC)」[1925/一部現存]、「横浜一般病院」[1937]、「横浜外国人墓地正門」[建設年不詳/現存]などである。2つ目はミッション系の建築。東北学院校舎群(専門部(現・大学本館)[1926]および礼拝堂[1932]のみ現存)、関東学院校舎群(中等部校舎(現・中学本館)[1929]のみ現存)、「立教大学予科校舎」[1937/現存]、「横浜クライストチャーチ・山手聖公会聖堂」[1931/現存]、松山女学校(現・松山東雲中学・高等学校)校舎群(正門[1928]のみ現存)などである。3つ目は、オフィスビル。「ニューヨーク・ナショナル・シティ銀行横浜支店」[1929]や「チャータード銀行横浜支店」[1931]、「同神戸支店」(現・チャータードビル)[1937]などである。そして最後が日本に在住する外国人の住宅である。「ラフィン邸」(現・山手111番館)[1926]、「ベリック邸」(現・ベリック・ホール)[1930]、軽井沢「デビン邸」[1936/現存]などである。

モーガンの作風はきわめて多彩である。公共的な建築や銀行建築では主として古典主義的な表現を用い、住宅にはスパニッシュ様式、ミッションの学校や教会では中世城郭風の意匠を用いるなど、持ち前の器用さが遺憾なく発揮されている。一方、松山女学校の建築においては、松山城内という場所性を勘案し、日本建築の要素を取り入れたミッションスクールをつくり上げた。

あえて言えば、日本建築もまた、モーガンが手にした歴史主義建築のカードのひとつだったのだ。モーガンの作品年譜を見ると、決して多作ではないものの、きわめて順調に仕事をしてきた様子がうかがえる。モーガンの人柄によるところも大きかったのだろう。逝去の際に雑誌「日本建築士」[7]に掲載された追悼文の中で桜井小太郎は、モーガンについて「米国人通有の性格の内多くの好い部分だけを多く持って居られて、きわめて明朗快活な紳士であった」と讃えている。

和洋折衷のモーガン邸

モーガンは藤沢市大鋸に昭和6年[1931]頃、自邸を建設した。現存するモーガン設計の山手の洋館はいずれもスパニッシュ様式の華やかな建築だが、モーガン邸はやや趣が異なる。外観こそ、オレンジがかった瓦屋根に白いモルタルの外壁を持つ洋館だが、内部の居室である居間・食堂は広縁付きの続き間形式をとり、真壁で長押や欄間を備え、両室ともに床の間を持つ。一方、床は板床で、天井は中心飾りを持つ洋風天井、ラジエーターを内蔵する造付け食器棚、さらに居間の床の間に隣接するのは暖炉であり、和洋の折衷した室内空間が展開する。台所や浴室、その他諸設備は、モーガンが手がけた山手の洋館同様、きわめて機能的で当時の先端をいくものだった。

外観と内部のあまりにも異なる印象。これこそがこの住宅の持ち味であり、また、モーガンが自邸だからこそ実現できた日本建築と西洋建築の融合だった。

モーガン邸はその存在を長く知られずにいた。平成11年[1999]、ラフィン邸の改修工事を担当していた建築家・菅孝能氏が深い緑の中に埋もれていたモーガン邸を発見した。当時すでに整理回収機構の管理下にあり、開発の危機にあった。その後、地元を中心に保存のための活動が展開され、日本ナショナルトラストと藤沢市が取得するに至り、モーガン邸は生き続けることになった。取得の記念式典が行われたのは平成19年[2007]3月だった。しかしその2ヵ月後、モーガン邸は残念なことに放火によって大きく傷つき、さらにその半年後の再度の放火は、モーガンがたまの両親のために設計した付属屋までも奪っていった。

モーガンが日本にもたらしたもの

モーガンが日本にもたらしたものを考えてみよう。

開港以来、多くの外国人建築家が来日した。モーガンもその一人である。しかし、モーガンは来日時にすでに成熟した建築家だった。ニューヨークを中心に多様な建築を手がけ、時代が要求する新たな設備や構造、施工に関する確かな知識も身につけていた。モーガンは、日本にありながら、同時代のアメリカの建築を導入することができた。施主が外国籍の企業やミッションの学校だったこともそれを後押しした。彼らもまた、それを望んだからである。

さらに、モーガンはアメリカそのものを日本に持ち込みながら、日本の建築に深い関心を寄せた。先の追悼文の中で桜井は「君が我国渡来の初めにおける作品は純米国式であったが、君が我国に同情深く恐らく永住のつもりでおられた結果は、君が晩年の作品の上にも現れ」としている。モーガンは経験豊かな建築家として来日し、日本建築の魅力を発見し作品に投影した。残念ながら、モーガンは自らの言葉を何ひとつ書き残さなかった。したがって私たちはその建築をテキストにし、モーガンのメッセージを受け止めるしかない。モーガン邸はその格好のテキストである。いつかモーガン邸が復元され、モーガンのメッセージを多くの人々が受け取ることで来る日が来ることを願ってやまない。

みずぬま・よしこ——関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科教授/1976年、日本女子大学家政学部住居学科卒業。1981年、同大学院家政学専攻科住居学専攻修了。工学博士。専門は日本近代住宅史。主な著書:『日本住居史』(共著、吉川弘文館/2006)、『Jay H. Morgan—アメリカと日本を生きた建築家』(関東学院大学出版会/2009)など。



松山女学校(現・松山東雲中学・高等学校)正門 | 石垣の上に入母屋造の建物を置いた、櫓門のようなミッションスクール正門である。他の校舎も真壁入母屋、あるいは真壁寄棟とし、和風を意識した建築群だった[写真:筆者]



モーガン邸

上——建設当時の外観:国道1号線沿いの高台に位置する。木造平屋建てだが、他のモーガンの住宅同様、ボイラー室や作業室の置かれるRC造の地下を持つ。屋根はオレンジ瓦、外壁は白色モルタル塗り。屋根窓や高く持ち上げた煙突、アーチを用いた玄関ポーチなど洋館の要素は備えるものの、全体としては簡素な印象の外観である[所蔵:高橋利郎/提供:筆者] 中——建設当時の内観:奥が食堂で手前が居間。壺や絵皿を所狭しと置き、日本趣味への傾倒をうかがわせる[所蔵:高橋利郎/提供:筆者] 下——居間:暖炉と床の間が隣接する、きわめて興味深い構成である。真壁に長押を回すのが、板床で椅子座の起居様式に対応する[写真:筆者]

[7] 1938年5月号。同誌にはモーガンの簡略な年譜や作品履歴も付されている。また同誌によれば、モーガンは自ら士会に入会した最初の外国人建築家であるという

ベリック邸 (現・ベリック・ホール)

竣工年:1930年

所在地:神奈川県横浜市中区山手町72
規模:地下1階、地上2階 | 構造:木造、RC造
横浜市認定歴史的建造物



2



3



4



5

1—玄関ホール:スパニッシュ様式の特徴のひとつに鉄製の装飾柵(アイアングリル)を挙げるができる。縦横柵の中に渦巻き状の幾何学紋様の柵を組み込んだ見事なグリルである
2—正面全景:クリーム色のスタッコ仕上げの外壁、軒周りのタイルワーク、3連アーチ、クワトレフォイル、瓦を載せた煙突、ソテツやシュロの植生など、スパニッシュ様式の要素に満ちあふれた華麗な外観である
3—リビングルーム:ベリック氏はイギリス人貿易商で、フィンランド領事も務めた人物である。南面、北面双方をア

ーチ状の連続開口とし、明るく華やかな社交の場であったことをうかがわせる
4—ダイニングルーム:正面暖炉は電気ストーブを置く形式。天井に重厚な化粧梁を見せる構成は、洋館の食事空間の典型ともいえるべき意匠である。北側壁面に装飾用のアルコーブを設ける
5—クワトレフォイル:四つ葉状の文様の窓で、スパニッシュ様式の建築にしばしば用いられる。ベリック邸では2階4か所に設けられる



東北学院ラーハウザー 記念礼拝堂

竣工年:1932年

所在地:宮城県仙台市青葉区土樋1-3-1
規模:地下1階、地上1階 | 構造:RC造



2



3

1—礼拝堂内観:米国の一信徒、ラーハウザー婦人の寄付によって実現した礼拝堂。東北学院の講堂としての機能も併せ持ち、装飾を抑えた簡素な意匠である。正面のステンドグラスは英国製。当初のパイプオルガン(正面右手のみ)は米国モラー社製

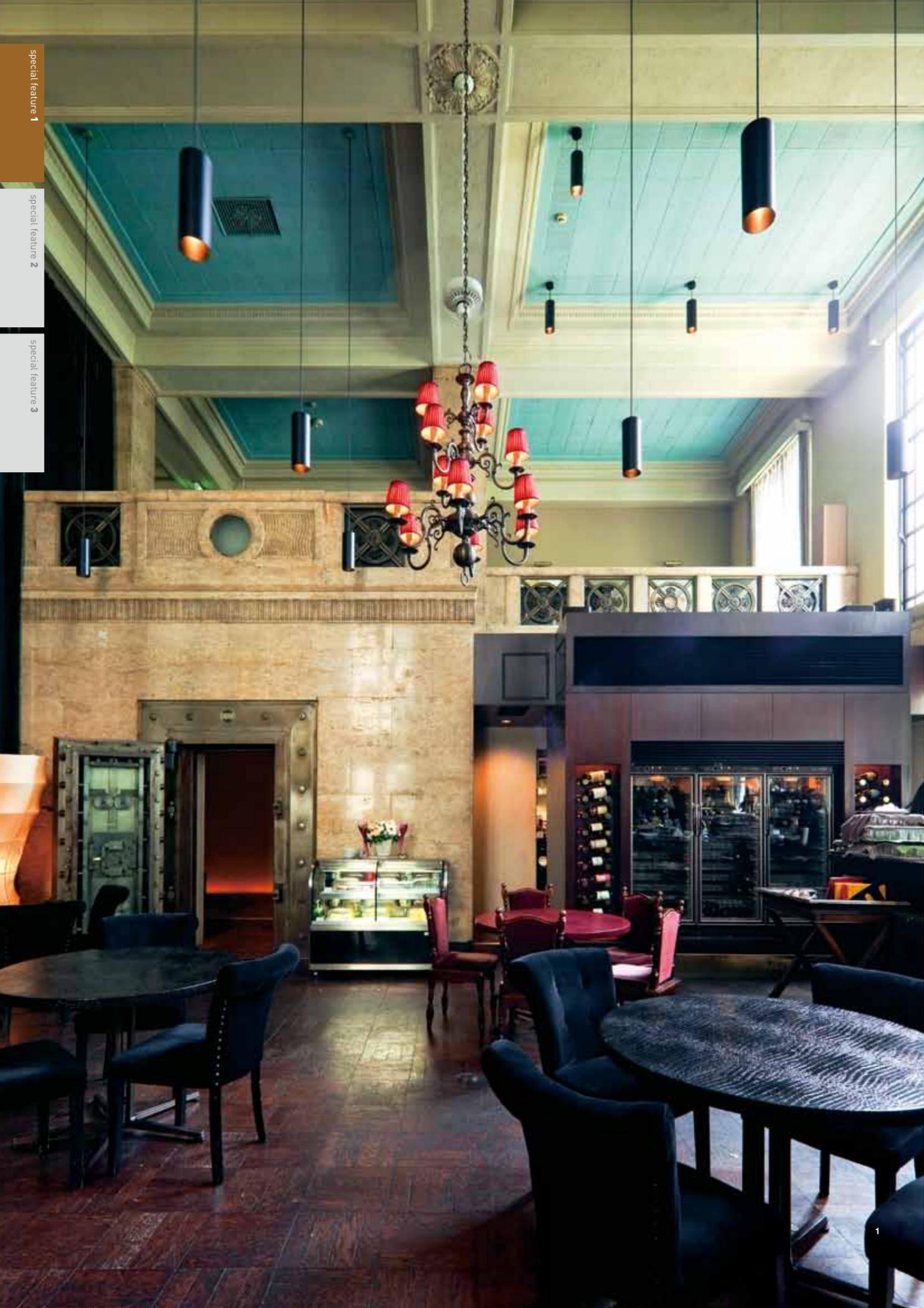
2—東面外観:本館に隣接して配置され、学院の歴史ある景観を形成する。外壁には地元で産出された秋保石を用いる。扁平の尖りアーチ(チューダーアーチ)、パトレスの表現などチューダー・ゴシック風の意匠を採用する

3—会衆席:モーガンの教会建築は清明さに特色を持つ。会衆席にはスチーム暖房が組み込まれるなど、モーガンならではの工夫が見られる。照明器具は当初のものとは異なる

4—東北学院大学本館:東北学院2代院長D.B.シュネーダーの尽力によって専門部校舎として竣工。外壁には礼拝堂同様、地元産の秋保石を使用。パラペットのバルメント(狭間胸壁)など、中世城郭風意匠は関東学院校舎などにも共通する



4



チャータード銀行神戸支店 (現・チャータードビル)

竣工年:1937年

所在地:兵庫県神戸市中央区海岸通9
規模:地上4階 | 構造:RC造



2



3



4



5



6

1—営業室:チャータード銀行(Chartered Bank of India, Australia & China)は1880年、横浜に支店を開設した後、居留地貿易に大きな役割を果たした外国銀行である。モーガンは同銀行横浜支店も手がけている。銀行営業室は現在、カフェとして利用されており、交点に装飾を施した格天井や大理石張り金庫室、メザニン(中2階)の手すりなどに外国銀行時代の面影を残す

2—南面全景:2層分の高さを持つピラスター(付け柱)がファサードを特色づける。モーガンが得意とした古典主義的意匠であるものの、上部は装飾を排除したきわめて簡潔な意匠とする。竣工はモーガン逝去後の1937年で、事務所設立時からのスタッフだった大須賀矢雄が完成に導いたものと考えられる。また、本建物は阪神淡路大震災でもほとんど被害を受けず今日に至る。モーガンが得意とした銀行建築として唯一、現存する建築である

[補注]2階と3階の間に、腰を折れば十分入る配管スペースが隠されている。また、オイルヒーターの床暖房や屋上からの送風機によるクリーンエアシステムが残っており、当時としてはハイテク/ロジューなインテリジェントビルだったようだ(編集部)

3—事務室:英国系の船会社、貿易会社が入居していた時期もあった。現在は、レストラン、パーティー、ウェディングスペースとして利用されている

4—営業室入り口の回転ドア:現在も創建時のものが使われている

5—支配人室のマントルピース:中央に花綱飾りを付した大理石製マントルピース

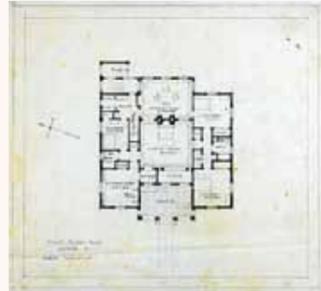
6—アプローチロビー:1時期は英国領事館やパナマ領事館が入居していた。現在は、控え室フロアのロビー

ラフィン邸(現・山手111番館)

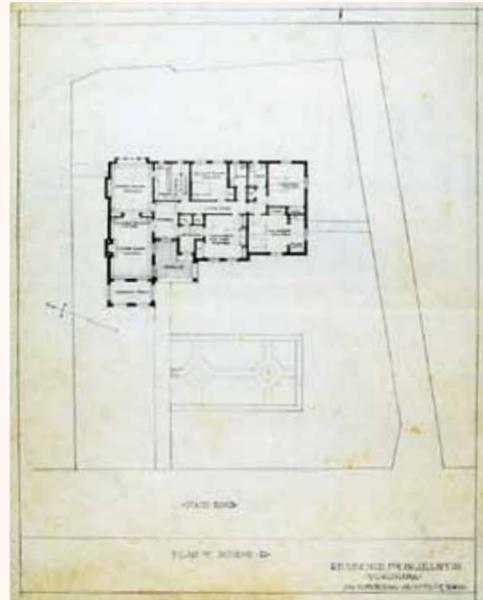
1926年竣工。ラフィン氏はアメリカ人両替商。ファサードの3連アーチなどスパニッシュ風だが、リビングルームを吹抜けとし、上部にギャラリーを回す平面は、山手西洋館の中ではきわめて特異である。2階海側にはスリーピングポーチを置く
 1—正面全景 | 2—平面図(スキームA)※:ラフィン邸の平面図案は4案作成されている。A案はリビングルーム・ダイニングルームを中心に個室が配置されており、現状に最も近い | 3—平面図(スキームD)※:図中の書き込みから尺を単位に設計されていることが分かる。道路側に描かれた幾何学的な庭園は、関東大震災前に当該地に所在した庭園の一部



1



2



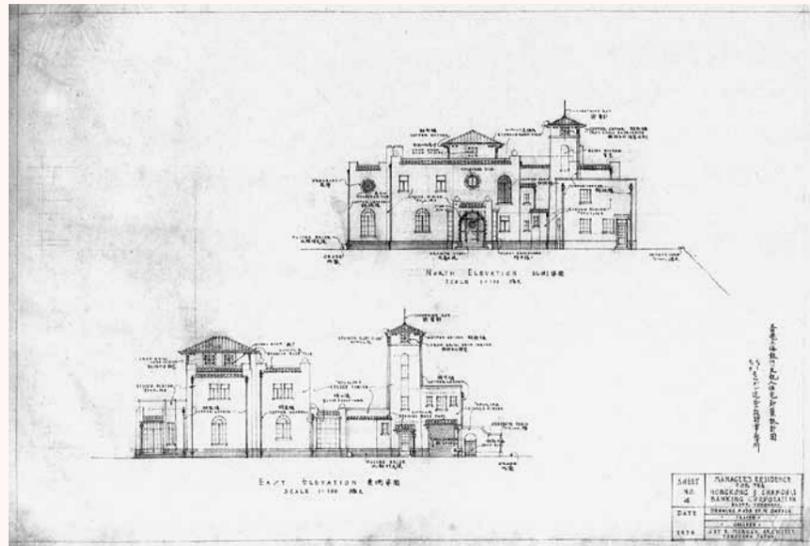
3

香港上海銀行支店長住宅

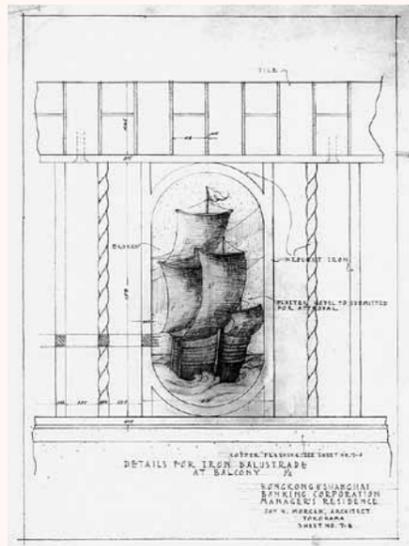
モーガンは香港上海銀行横浜支店を1933年に手がけている。同支配人住宅は1934年竣工で、スパニッシュ風の寄棟屋根、スタッコ仕上げの外壁、開口部周りのタイルワークなど、スパニッシュ様式の特徴がふんだんに盛り込まれている。1942年まで支配人住宅として使用された後、研究所施設、進駐軍による接収などを経て、1986年取り壊された
 4—研究所として使用されていた1944年頃の外觀写真[出典:Jay H. Morgan—アメリカと日本を生きた建築家] | 5—バルコニーの手すりパネルの帆船レリーフスケッチ※ | 6—北立面図および東立面図[1934]※ | 7—断面図、右上は玄関ホール飾棚詳細[1934]※



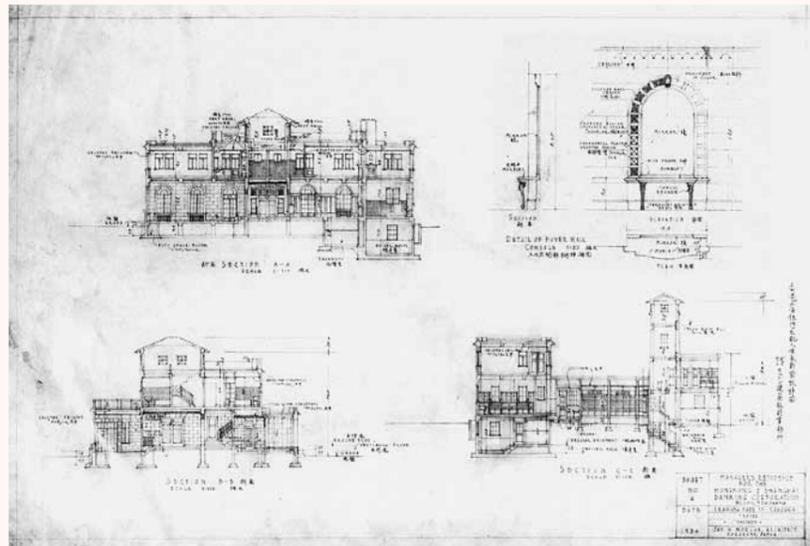
4



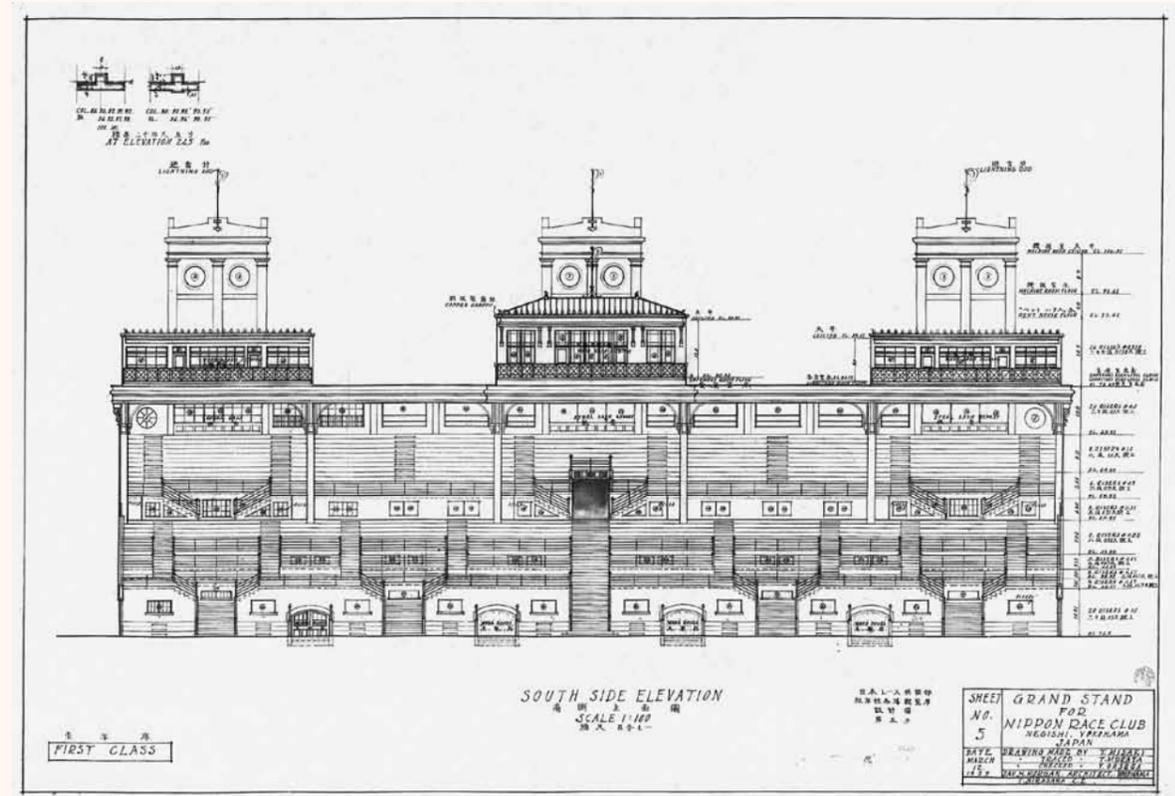
6



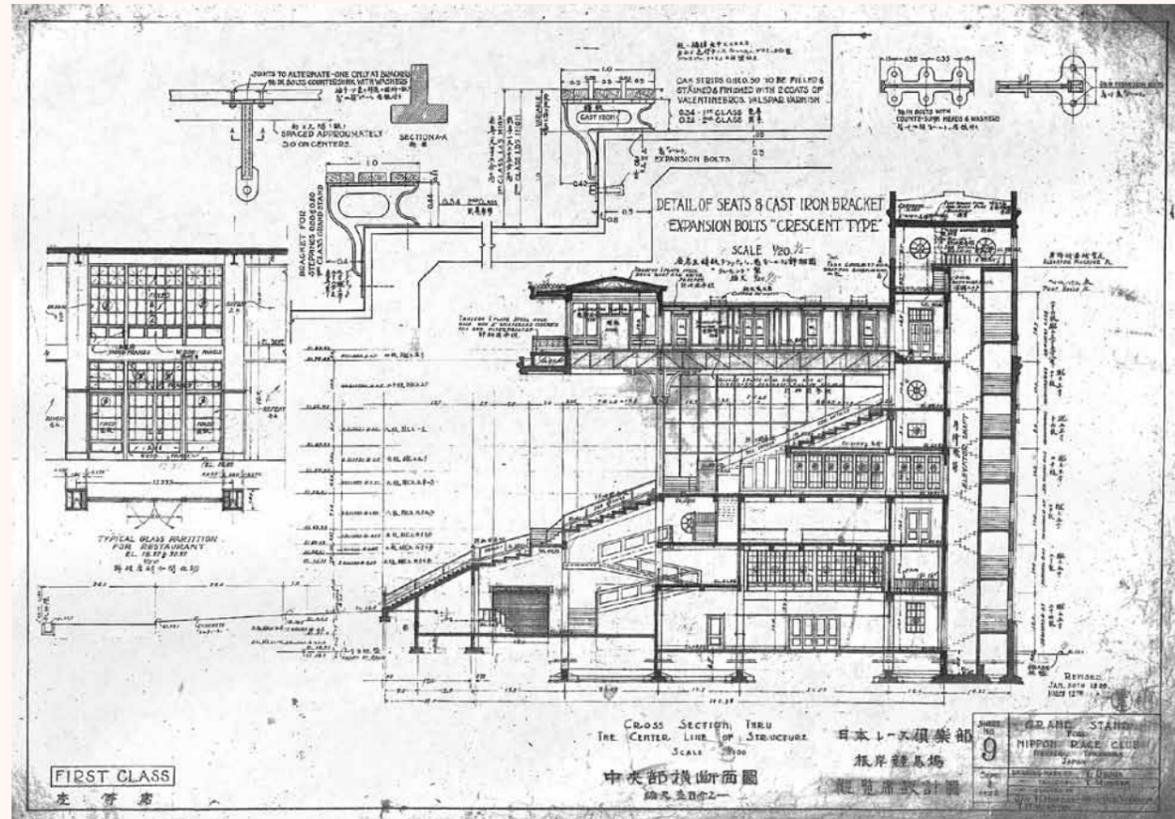
5



7



8



9

8—根岸競馬場一等馬見所南側立面図[1929]※:幅約60m(200尺)、奥行き約30m(101.25尺)、約6,000人を収容する大スタンド。古典主義的意匠を細部に用いた3ヵ所の階段室塔屋が外觀を特徴づける
 9—同中央部横断面図[1928]※:スタンドは鉄骨トラスの大屋根で覆われ、「Emperor room」と記された貴賓室はキャンティレバーの先端に置かれ、鳳凰の文様を描いた折上格天井で装飾される
 ※—所蔵:横浜開港資料館

略歴 | Biography

明治元年[1868] 12月10日、ニューヨーク州バッファローに家具職人トーマス・モーガンの長男として誕生
明治18年[1885] この頃、ミネソタ州ミネアポリスに一家で転居
明治22年[1889] ウェン・B.ダネルの事務所にドラフトマンとして勤務。ポーウェン邸が雑誌に掲載される
明治25年[1892] ウィスコンシン州ミルウォーキーのウィリアム・D.キンボルの事務所にドラフトマンとして勤務。この頃、オーガスタ・ジュズビエーブ・ショッソーと結婚
明治29年[1896] ミルウォーキーのオットー・ストラックの事務所にドラフトマンとして勤務。長女キャサリン・エレノア・モーガン誕生
明治31年[1898] 次女ルシル・ベアトリス・モーガン誕生
明治32年[1899] フラー会社の招きにより、ストラックと共にニューヨークへ。肩書きはドラフトマン
明治35年[1902] ストラックの事務所退所。フラー会社に勤務か
明治37年[1904] 長男ジェイ・ハーバート・モーガン誕生
明治38年[1905] ニューヨークの大型劇場ヒッポドロームを設計
明治42年[1909] チャールズ・A.リードの導きにより、ニューヨーク・セントラル鉄道会社入社
明治44年[1911] リードの逝去に伴い、ニューヨーク・セントラル鉄道会社退社。マンハッタン区マディソン街331で設計事務所を自営
大正6年[1917] 建築家として軍に参加か
大正9年[1920] 1月、サンフランシスコからナイル号に乗り、日本へ。2月20日、到着。3月19日、フラー会社と三菱合資会社地所部が合併会社・フラー建築株式会社(ジョージ・A.フラー・カンパニー・オリエント)を設立し、モーガンはフラー会社から唯一の建築家として参画。7月、丸ノ内ビルディング着工。9月、日本郵船ビル、日本石油ビル(有楽館)着工。石井たまのと知り合う
大正11年[1922] 8月、日本郵船ビル内に建築設計事務所を開設。12月、フラー建築株式会社退社
大正12年[1923] 9月、関東大震災。日本建築士会入会
大正15年[1926] 4月、横浜露亜銀行内に事務所移転(横浜山下町51B)
昭和3年[1928] ユニオンビルディング内に事務所移転(横浜山下町75)
昭和12年[1937] 6月6日、横浜一般病院で急性気管支肺炎のため逝去(68歳)

主な作品 | Works | ●印は現存

大正10年[1921] クレセントビル(兵庫)
大正12年[1923] 立憲政友会本部(東京)
大正13年[1924] 三崎会館改修工事(東京)
大正14年[1925] ヨコハマ・カントリー・アンド・アスレチック・クラブ(YC&AC)(神奈川)● | デビン邸(長野)●
昭和元年[1926] 東北学院専門部(宮城)● | ラフィン邸(神奈川)● | ウォーター邸(兵庫) | メンデルソン邸(神奈川)
昭和2年[1927] 関東学院高等学部校舎(神奈川) | ユニオンビルディング(神奈川) | 中外舎蜜工場(大阪) | 松山女学校体育館・宣教師館(愛媛)
昭和3年[1928] 東北学院ハウスキーパー社交館(宮城) | ジレット邸(神奈川) | 松山女学校寄宿舎・正門●(愛媛)
昭和4年[1929] ニューヨーク・ナショナル・シティ銀行横浜支店(神奈川) | 尚綱女学院インディアナビルディング(宮城) | 関東学院中等部校舎(神奈川)● | 根岸競馬場一等馬見所(神奈川)●
昭和5年[1930] ベリック邸(神奈川)● | 根岸競馬場二等馬見所(神奈川)
昭和6年[1931] チャータード銀行横浜支店(神奈川) | 横浜クライストチャーチ・山手聖公会聖堂(神奈川)● | この時期、モーガン邸(神奈川)
昭和7年[1932] アメリカ領事館(神奈川) | 東北学院ラーハウザー記念礼拝堂(宮城)●
昭和8年[1933] 香港上海銀行横浜支店(神奈川) | ホテル・ニューグランド増築工事(神奈川)
昭和9年[1934] 香港上海銀行支店長住宅(神奈川)
昭和10年[1935] シーベル・ヘグナービルディング(神奈川)
昭和11年[1936] デビン邸(神奈川)● | クック邸(神奈川)
昭和12年[1937] 立教大学予科校舎(東京)● | 横浜一般病院(神奈川) | チャータード銀行神戸支店(兵庫)●



モーガンと石井たまの | たまのの甥にあたる高橋利郎氏によれば、モーガンは日本語を全く話さなかったという。たまのの存在に負うところが大きかったのだろう。たまのは戦後、竹中工務店から依頼を受け米軍との折衝の手伝いをした後、駐留軍従業員として定年を迎えた。モーガンの月命日である6日には、横浜外国人墓地訪問を欠かさなかったという[所蔵:横浜都市発展記念館]



玄関前のモーガン | モーガンとたまのの日常生活を記録した写真帖が複数残されており、友人たちと楽しげに交流し、庭仕事に励み、愛犬とたわむれる、のどかな生活の様子がうかがえる。モーガンは来日後から着物を愛用していたようで、ワイシャツの上に着物を羽織った姿もしばしば見られる[所蔵:横浜都市発展記念館]

取材協力:財団法人横浜市緑の協会/東北学院大学/E.H BANK / THE CHARTERED SQUARE(プレマリエ ジャパン) | 参考資料: [Jay H. Morgan—アメリカと日本を生きた建築家]水沼淑子著[関東学院大学出版会/2009]/「横浜建築家列伝」青木祐介編著[横浜都市発展記念館/2009] | その他:特記のない写真は撮り下ろしです | 次号予告:「INAX REPORT No.185」の「続・生き続ける建築」は高橋貞太郎です